

### 第3回検討会における主な意見の概要等

- 核家族化で65歳や70歳過ぎて一人暮らしをしている高齢者のために、空き家を活用してグループで住むのか、新たに有料老人ホームを建設するのかについて議論していくべき。
- 多世代共生型CCRCとしての一般住宅は特別なメリットであるとか、購入価格が安いといったような、若い世帯を引き込むような要素があるのか。今の若い方々は、家を購入される際に周りとの関係を強くもつことをあまり好まないことも考えられる。
- 子育てサークルでも若い方の参加が減っている。多世代が共生するCCRCエリアに住むことは、若い世帯にとってのメリットがないと好まれないのではないか。
- 一般住宅エリアは一軒家が集合しているイメージか。コミュニティスペースは新たに整地するのか、高齢者住宅はマンションタイプの高齢者専用賃貸住宅のようなイメージか。また、CCRCは民間事業ということだが、町としてはどういった関わり方をしていくのか。
  - 一般住宅は、一軒家が立ち並ぶエリアをイメージしているが、その中にはアパートもあるかもしれない。若者やファミリー層が居住する場所としての機能だが、現状で形式が固まっているものではない。

コミュニティスペースは、高齢者住宅の一角に設けられる場合や別に設ける場合もあろう。あるいは既存施設の活用も考えられるかもしれない。昨年度の研究会ではCCRCエリア以外にお住まいの住民も含めて交流できるコミュニティスペースが提案され、その例として飲食スペースやスポーツトレーニングスペースといったものが挙げられていた。

高齢者住宅は他の国内の事例を参考にすれば、2階建て程度の長屋タイプが立ち並ぶものもあれば、マンションタイプのもの、平屋建てが点在するものなどが考えられる。

これらの事柄の具体的詳細を確定する議論はこれまでなされていない。最終的には事業性との関係で決定されるべきと考える。(事務局(総務課))

- 米国にはCCRCが約2,000箇所あり、約80万人の方が生活されている。CCRCとは、加齢と共に変化するニーズに応じて、住宅、食事、ヘルスケア、医療、介護予防、社会活動を提供し、同じ場所で最後まで暮らせる総合施設であり、住民の財産であるとされている。

CCRCの中では、精神的・身体的変化に応じて何らかの支援が必要になっても、適切なハード、ソフトが備えられており、自立型の住まい、支援型住まい、介護型住まいに移行できることになっている。一つのCCRCに自立型住まいが200室くらい、ナーシングホーム（介護型住宅）が80室くらいある。そして、脳梗塞で倒れても完全な寝たきりにならないように、日本で言えば要介護1から要介護3の方々の自立を支えるための支援型住宅がある。

米国、イギリス、スウェーデン、デンマークでは、高齢者の5%程度が介護施設、3～5%程度が自立型住まいで暮らしている状況。この数字を使うと3,500人の高齢者がいる聖籠町では100人分の住まいが目安。もっとも、それぞれの自宅で最期まで暮らせることが理想だが、一人暮らしの不安、医療の不安、一人であるからおもしろくないといった寂しさ、全体の3%であるがこうした声に対応したものがCCRCである。

ほとんどの高齢者を自宅で支えるにしても、100人程度のCCRCが中心的なものとしてあれば、そのためのサービスを構築しやすいのではないか。米国のCCRCをそのまま取り入れるのは無理があるが、地域包括ケアシステムの中にCCRCの良いところを取り入れ、町民のニーズに合ったものを考えていけば良いのではないか。（会長代理）

- この構想の考え方（資料1）を整理したい。一見、高齢者にとってのまちづくりのように見えるが、そうではなくて超高齢化社会を見据え、いずれの世代も聖籠町で豊かに暮らしていくためのまちづくりと理解している。その中では、若者、ファミリー層、高齢者は互いに頼ったり、頼られたりする部分があるだろうし、その一つとして、一人暮らしなどの高齢者のためのCCRCや多世代の交流のための機会について議論していけばよいものと理解している。（会長）
  - この議論の前提にあるのは超高齢者社会への対応がある。その中で、若者、ファミリー層、高齢者がどういった人生設計をして、お互いが共生していくかということだろう。（事務局（地方創生戦略監））
- 今後とりまとめる報告書について、生涯活躍のまちを議論する背景と目的に

ついて触れることで、わかりやすくなるのではないか。

- 多世代が仲良くふれあい、関わりを増やすことで、お互いが支え合うことができるのではないか。一人で夕食を食べている子どもたちを集めてボランティアが食事を出して、宿題も見てくれるような「子ども食堂」だったり、子育て世代のちょっとした手助けなどがあったらよいのではないか。
- 高齢者と地域の人々を結び付けるコーディネーターがいればよいのではないか。
- 新たにＣＣＲＣの施設を建設したり、地区を設定したりするという考え方もあるが、空き家を活用して聖籠町全体を一般住宅という位置付けにしても良いのではないか。シェア金沢の例を参考に、ボランティアやアルバイトをすることで一般住宅に安く入居できるようなことを町全体でやっていければ、コミュニケーションも取りやすくなるのではないか。
- ふれあいを創出する場として、多世代が交流するコミュニティスペースの在り方について検討していく段階かと思う。
- ＣＣＲＣについては町の関わりについても議論すべきと思うが、事務局はどう考えているか。(会長)
  - 次回は民間事業としてのＣＣＲＣに対する町の関わり方や場所の考え方についてもご議論いただければと思う。

この会議におけるＣＣＲＣの議論は、東京から地方への移住促進が第一の目的ではなく、町民のためのＣＣＲＣであり、高齢者の自立を支え最期まで暮らすことができる住まいやサービスを考えるものであることを確認しておきたい。(事務局(地方創生戦略監))
- 地域包括ケアを進めるには、住まい、医療、介護予防、生活支援のほか、交流・社会参画まで全体をコーディネートできる人材が重要な役割を担う。ケアマネージャーでは全体をコーディネートするのは難しい。講ずべき施策の中でコーディネーターの役割を明確にして育成することを加えてはどうか。

(会長代理)

- どのような形で地域包括ケアシステムを運用していくのかをもっと議論した方がよい。その際、ＣＣＲＣ以外の高齢者への対応はどうするのかを検討する必要がある。また、ファミリー層の住宅は、新たな地区を設けるよりも、空き家を格安で提供するよう援助する方法もあるのではないか。それぞれの局所的な議論だけでなく、構想を大局的に考えていく必要がある。
  
- 聖籠町の規模からすれば、まちごとＣＣＲＣと考えるべき。その中では空き家を活用して高齢者数人で住むというやり方などいろいろなものがあると思うが、中心となるべきものが必要ではないかという議論をしている。その中心を担おうとする事業者については、（内閣府が出している）日本版ＣＣＲＣでは、行政と住民の合意のもとに監督していくとされている。（会長代理）
  
- ある程度中心的なものをつくるが、町の中には他にも元気な高齢者が集えるところがあって、そこを地域包括ケアシステムがつなげていくということなら、少し具体的な議論をした方がよい。
  - 私の考えとしては、町全体で地域包括ケアシステムを作っていくのだろうと考えており、その核的な機能を期待するものが多世代共生型ＣＣＲＣではないかと思っている。高齢者のご自宅を繋いでいって、必要なサービスがＣＣＲＣからも提供できるようになれば、地域包括ケアをより強固なものにすることになるだろう。そこで期待したいのが介護予防であり、自立した生活を支援していくことにある。これは介護保険財政の安定化の一つの手段にもなる。

ただし、ＣＣＲＣの実現については民間事業とすることが昨年度の研究会では提案されていることから、町のコンセプトの下に、事業者が手を挙げてくる場合には、町としては適切な範囲で支援していくことになると考えている。

空き家の活用については、高齢者向けのための改修や点在する空き家を結び付けてサービスをどのように提供するかという課題もあると思う。私としては、空き家は若者・ファミリー層向けに活用してはどうかと考えているが、ご議論いただきたい。（事務局（地方創生戦略監））
  
- 資料３について、行政用語的な言い回しが難しいため、分かりやすい表現を心掛けてはどうか。

- 地域包括ケアシステムに関して、一番重要なのは在宅医療の体制確保と考える。いつ倒れても、医師や看護師が 24 時間対応で駆けつける体制を要望する。
  - 在宅医療の確保については重要な施策と思う。医療機関の方々のご理解を得られなければ実現できないものであり、連携の構築が課題だと思っている。(事務局 (地方創生戦略監))
  
- 資料 3 の現状と課題との部分であるが、町がどういうことをやっているのか、現状を把握しづらいので配慮してほしい。それによって、追加すべき施策やそこまで求める必要のない施策もあるかもしれない。
  
- 今、日本で C C R C に手を挙げた市町村の中で港を持っているところは聖籠町しかない。C C R C と仕事、港とは切り離せない関係にある。C C R C のまちづくりと港の発展とが相乗的になるのがよい。例えば、東港工業団地の企業には全国規模の大きな企業もある。現在、介護の事情で思うように働けない介護離職が全国的な問題になっているが、東港工業団地で働くことで、町が高齢者介護の支援をしてくれるとなれば、企業と福祉が連携することが期待されるのではないか。
  
- 獲る漁業からつくる漁業への転換について意見があったように記憶しているが、資料 3 に記載がないのはなぜか。
  - 「総合的かつ計画的に講ずべき施策」においても、網羅的に書くとなると、町の総合計画を新たにつくるようなことになってしまうため、ある程度の集中化が必要と考えて施策の対象者の規模から、資料 3 の「しごと」では農業と商工業に絞っている。しかし、書いていないからと言って漁業に関する施策自体の重要性について評価しているわけではないとご理解いただきたい。あくまで私の案に過ぎないので、やはり追加すべきというご意見があればそのようにしたい。(事務局 (地方創生戦略監))
  
- 地域包括ケアシステムがまだ機能しきれていない中で、C C R C が一つの手段として提案されているものと理解している。超高齢化社会の中で、一番孤独で不安を抱えているのは高齢者だと思う。そういった方々への手立てを作っておくことで、皆さんが安心し、かつ幸せに暮らしていけることにつながるのではないだろうか。

- C C R Cについて、町がどのように関わっていくのか、事業性を重視して進めていくのか、事業者とボランティアとで進めていくのか、といった点について検討を深めていくべき。
- 子育て中のお母さんたちには、孤独な方もいるのではないか。小さいお子さんがいるお母さんが外に出やすくなるために、町の施設やイベント会場における授乳室の整備を進めてはどうか。また、保育園で一時預かりを行っているが、もう少し預けやすくなるように、理由に問わず預かってもらえるようになれば良いと思う。
- 町の第4次総合計画があり、まち・ひと・しごと総合戦略があり、他にも様々な計画が策定されているが、それぞれの計画の現状はどうなっているのか。まち・ひと・しごと総合戦略でもここで議論しているようなことが入っているので、事務局で参考にしてはどうか。
- 高齢者だけに良い社会でもだめで、若者にだけ良い社会でもだめだと思っている。生まれてから亡くなるまで、ライフステージが変わってもここで暮らしていて良かったと思えるまちを目指すべき。多世代共生型C C R Cでは、高齢者住宅と一般住宅を結ぶ交流スペース、交通網の整備、高齢者の安全管理システムが重要。また、介護予防では、ITを使って買い物履歴を活用した栄養指導などいろんな仕組みが考えられると思う。まずは、町にとって住みよいまちづくりのためのC C R Cとだが、将来的には聖籠町の魅力の一つとして外から人を呼び込む要素になれば良い。聖籠町にはそれだけの潜在力がある。

(文責：検討会事務局 事後修正する場合があります)